

運動やスポーツが苦手・嫌いな生徒に効果的な 体育理論の授業に関する研究

— 「運動やスポーツとの多様な関わり方」の実践を通して—

佐藤 哲 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究の目的は、運動やスポーツが苦手・嫌いな生徒が肯定的な感情を得ることができる体育理論の授業を検討し、実践することで生徒が新たな価値観や考え方を獲得すると仮説を立て、その仮説を検証することである。

2. 研究方法

1) 対象者 国立大学附属 K 中等教育学校 1 年生 54 名と質問紙調査により抽出した女子生徒 A

2) 調査方法 「運動やスポーツの多様性」についての体育理論とハンドボールフェスティバルを組み合わせた単元構想、授業づくり及び保健体育教諭 T による実践の観察と「体育への苦手意識」の質問紙調査

3) 分析方法 質問紙調査は SPSS24.0 を用いて実践前後の各因子の平均値を対応のある t 検定で分析した。有意水準は 5%未満とした。また、単元終了後の感想カードの記述や授業観察、女子生徒 A らが作成したポスターから総合的に分析した。

3. 結果と考察

1) 因子分析の結果、比較感情の平均値に有意差は認められなかったが、回避感情、劣等感感情、嫌悪感情の平均値に関しては有意差が認められた。本実践は以上 3 つの感情の低減に効果的であったといえ

る。話し合い活動がハンドボールフェスティバルの成功につながったという成功体験や、実生活の中の運動やスポーツとの親しみ方に近い状況を生み出すことができたことが以上 3 つの感情の低減の要因だと考えられる。

2) 運動やスポーツが苦手・嫌いと感じている抽出女子生徒 A の回避感情が実践前後を通して大きく低減した。調べ学習を通して「する」だけではなく、「知る・学ぶ」という運動やスポーツとの多様な関わり方を新たに発見したことが大きな要因だとわかった。

4. 結論

本実践は体育授業で感じる回避感情、劣等感感情、嫌悪感情の低減に効果的であったことが示された。また、抽出女子生徒 A の分析から、本実践が運動やスポーツが苦手・嫌いな生徒が肯定的な感情を得る可能性がある授業であるということも示唆された。

5. 主な参考文献

1) 菊池航生(2018) 運動場面における「苦手さ」の因子分析的検討. アダプテッド体育・スポーツ学 研究. 4 (1):24-27.

2) 原祐一(2017) 知識詰込みから“オープンエンド”の学習へ. 体育科教育, 64(10):32-35